

ハーン研究における新たな論点および再考—日系アメリカ文学、日系移民史の視点から

水野 真理子（富山大学）

I はじめに

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn: 1850-1904）の研究蓄積の年月は、ハーン没後から数えればゆうに 100 年を超える。膨大な研究書、論文が存在し、特に日本においてハーンの人生、作品がさまざまな角度から論じられ、ハーンの日本観や宗教観、『怪談』をはじめとする作品成立の背景などが探究されてきた。研究史に関しては、森亮が『小泉八雲の文学』（1980）の第五章「回顧と展望—日本におけるハーン研究」で、ハーン没後の 1905 年、友人の雨森信成が『アトランティック・マンズリー』（*Atlantic Monthly*）に寄稿した追悼論文「人間ラフカディオ・ハーン」（“Lafcadio Hearn The Man”）（1905）をはじめとして、1978（昭和 53）年までの日本におけるハーン関連の論文や書籍を、六部門に分けて概観している。次に、森の論文を受けて書かれた、平川祐弘編『小泉八雲—回想と研究』（1992）所収の銭本健二「八雲研究・回顧と展望—昭和五十四年以降について」は、「1. 作品集 2. 文学者としての小泉八雲 3. 八雲の日本研究 4. 批評家・文学教授 5. 人物像とメンタリティー 6. 足跡調査と文学紀行 7. 影響 8. 原典批評と資料・書誌」に分類し、1979 年以降のハーン研究を英語文献も視野に入れてまとめている。そして平川祐弘監修『小泉八雲事典』（2000）には、関田かおるによって、1975 年から 2000 年までの研究蓄積が「1. 八雲の著作・草稿 2. 単行本（研究書・小説・紀行） 3. 特集雑誌 4. 研究論文その他（1980 年から） 5. 書誌・年譜・事典等」の分類で、列挙されている。ここに挙げられている書名、論文名を通読するならば、ハーン研究の概要を一望できるだろう。また、同著所収のハーン年譜には、「ハーン没後」の項に、講演会なども含むハーン研究関連の事項が、年代順に記載されており、ここからもこれまでハーンが日本においてどのように注目され、論じられてきたかを探ることができる¹。

こうした多年にわたる研究蓄積を踏まえて、本年、「富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会」が発足した。本会は、旧蔵書「ヘルン文庫」を活用し、ハーン研究の一大拠点とするとの目標を掲げ、先行研究が見落としてきた新たな視点を持って、ハーン研究を深化させていくことを目指している。そうした研究会の趣旨にもとづき、本稿では筆者が専門としている日系アメリカ文学、日系移民史との比較の視点を導入して、ハーン研究の新たな論点や再考点をいくつか探ってみたい。

II 日系アメリカ文学、日系移民史との比較—「越境」「アイデンティティ」の問題

1. ハーンのアイデンティティ

これまでのハーン研究において、他国の文学との関連に関しては、ハーンがフランス文学や英米文学から得た知見、またハーンが日本文学にもたらした影響などが論じられてきたが、日系アメリカ文学との関わりという視点では、ほとんど検討されてきていない。それもそのはずで、フランス、英米文学、日本文学については、ハーンの作品、人生と直接的な関わりを示す伝記的事項やハーンの作品、書簡などの資料が存在するが、日系アメリカ文学については、後述する野口米次郎をのぞ

いて実質的な関係性を示すものは皆無である。そもそも、日系アメリカ文学が、アジア系アメリカ文学(Asian American Literature) のなかの日系アメリカ文学 (Japanese American Literature) として、アメリカ文学において市民権を得たのは、1960 年代末からはじまるアジア系アメリカ人運動 (Asian American Movement) 以降であり、それらとの直接的な影響関係を見出すことは当然、難しいであろう。本稿で試みてみたいのは、直接的な影響関係というより、1880 年代頃からはじまった日本人移民の歴史、在米日本人社会での文学活動において、しばしば着眼点とされる「越境」「移動」という観点を軸として、ハーンの人生や作家として成長していく足跡、そして彼の作品および作品を生み出した文学的営為に、新たな論点、再考点が見出せないかを探ることである。

日系アメリカ文学は、日本からアメリカに渡った一世世代による文学活動、アメリカ生まれの二世世代による英語での文学活動、そして三世以降の文学活動と、世代で分類されることが多い²。それは世代間のつながりや関連性のほか、各世代によって作品に明確な特徴がみられるからである。ハーンとの比較という視点でまず有用なのは、日本からアメリカへと渡った一世世代によって創作された日系日本語文学である。彼らの文学活動は、19 世紀末から開始し、1920 年代頃までに盛んに行われ、その後は二世との世代交代のなかで、活発さは失われていくが継続されていく。ハーンが記者、作家として活躍していく 1870 年代から 1904 年までとは、20 年ほどの開きはあるが、おおよそ同時代である。一世世代の文学活動は、アメリカの日本人社会で発行された日本語新聞の文芸欄を発表の場として、近代日本文学を、作品のテーマにおいても、また小説家が誕生するプロセスにおいても模倣しつつ、開始した。しかしながら、職業作家となることは難しく、文学を志す者たちの大半は、在野の文学愛好家、括弧つきの「作家」という存在であった。そのなかでも、著名な作家として真っ先に挙げられるのは、詩人野口米次郎 (ヨネ・ノグチ) (1875-1947) である³。彼の作品を日系アメリカ文学に含めるか否かという問題にもさらなる議論が必要ではあるが、1890 年代から 1910 年代頃、渡米熱と称される、日本からアメリカへの遊学が青年たちの間で盛んであった頃に、自由の国アメリカへの憧れと興味を抱いて渡米し、在米日本人社会で下積みの生活を経て、詩人として認められていった点において、野口も日系アメリカ文学の一世作家に含めてよいだろう。

野口のほかに、着目すべき一世作家は、在米日本人社会の文学愛好家、「作家」たちの間で、中心的な存在と捉えられてきた翁久允 (1888-1973) である⁴。彼は現在の富山県立山町出身で、1907 年に、やはりアメリカへの憧れ、新しい文明と社会を見聞してみたいという目的のもとに渡米した。在米日本人社会の日本語新聞に、短編小説などを積極的に投稿し、しだいに「作家」として頭角を現していく。さらには日本語新聞社に勤務し、記者や編集の職を務め、文芸欄を充実させて移民地文芸論を主張、在米日本人社会における文学活動を牽引していった。1924 年に日本に帰国するが、そののちは、『週刊朝日』の編集に携わりながら、アメリカ時代の経験を反映させた小説や随筆集を出版する。1930 年代頃には日本人移民のアメリカ生活を描く異色の新進作家として、日本の文壇でも注目を集めた。

彼らの文学活動は、一つの切り口として、日本とアメリカの「越境者」という視点で論じられることが多い。そのときに着目されるのは、アイデンティティをめぐる問題である。野口や翁の場合、

渡米前は自身が日本人であるという明確なアイデンティティを持っていた、もしくはアイデンティティそのものに関して疑問を感じる事などなく、日本人であることが当然の事実であった。ところが、アメリカ社会で生活し、多人種・多文化社会の現実、また日本人差別を経験することで、そのアイデンティティがしだいに揺らいでいく。野口に関して言えば、英語で作品を創作し、かなりの程度、当時の英米の詩壇で国際詩人として認められていた。しかしその結果、「二重国籍者」と感じる苦悩を抱くことになった。ただし、野口の国籍は日本のみであったため、「二重国籍者」とは、比喩的な意味で用いられている。これまで多くの研究者によって指摘されてきたように、『二重国籍者の詩』（1921）の「自序」に掲げられた詩には、その二重性をめぐっての心境が吐露されている。日本人からは、野口の日本語詩は拙いが、英語詩は上手いだろうと期待され、西洋人には英語の詩は読むに堪えないが、日本語の詩は立派なものだろうと皮肉を込めて評価されるという境遇、そしてそれを受けて「実際にいふと、僕は日本語にも英語にも自信が無い。／云はば僕は二重国籍者だ……／日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ……／不徹底の悲劇……」⁵と自嘲する彼の心情が綴られている。翁の場合も同様で、日米両国をまたぐ者として、日本人移民たちは、「日本人でありながら日本の国運と共に動く能わず、米国に在住しながら米国の国運と共に進む能わぬ」と表現し、不自然な生活を強いられているとする。そして、「その不自然な生活から起こってくる悲劇なり喜劇なりが、所謂移民地文芸の特色なのである。」として、移民地文芸創作の意義を述べている⁶。アメリカ、日本のどちらの社会にも居場所を見出せない、両国の狭間に生きている状況を意識し、そのために、翁は在米日本人としての境遇を文学として残すという目標のもと、移民地文芸の創作に没頭した。

ハーンも十分に「越境者」である。むしろ「越境」の繰り返しの人生であった⁷。ハーンにとっての、幾重にもわたる「越境」の意味、そしてアイデンティティをどう捉えるべきだろうか。父はアイルランド人（当時の国籍はイギリス）、母はギリシャ人である。ハーンの場合は出発点からアイデンティティは揺れていたと言ってよいだろう。そして、度重なる「越境」の人生である。1850年、ギリシャのイオニア諸島（当時は英国保護領、イオニア諸島合衆国）のレフカダ島にて生まれるが、2歳でアイルランドのダブリンに渡る。4歳で母と別れ、10歳まで父方の大叔母のもとで養育されるが、1861年、11歳になるとフランスの教会学校に入学、13歳にはイギリスのダラム郊外のカトリック系カレッジに入学する。1867～68年の17～18歳の間には、養育者の大叔母が破産、ハーンはカレッジを中退し、かつての使用人を頼ってロンドンへ行く。貧困の暮らしを余儀なくされ、19歳のとき移民船に乗ってアメリカへ渡る。1869～87年、19歳から37歳までのアメリカ時代では、シンシナティ、ニューオリンズ、ニューヨークと居を移しながら、新聞記者、作家として成熟していく。その後、マルティニーク島に渡り、39歳でアメリカに戻って、1890年、40歳で日本の地を踏んだ。日本時代においても、松江、熊本、神戸、東京と居住先は一か所にはとどまらなかった。池田雅之は、ハーンのアイデンティティは一元的に捉えられるものではなく、「マルチ・アイデンティティ」と称すべき多様性、多層性に満ちたものだったと指摘している⁸。この指摘は核心をついていよう。ただそれらに関して、ハーンの商品創作の営みも含めて、もう少し深い分析がなされる余地がある。

日系アメリカ人の文学活動においては、その越境性ゆえに、作家・文芸人の国籍やアイデンティティ、使用言語、対象の読者などが、二国間にまたがっている。それは日本に居住する日本人作家のように、日本人として、日本語を使用し、日本の読者に向けて創作するというような、日本という一国家を基準とする単一なつながりではおさまらない。日系アメリカ人の一世世代の「作家」であれば、日本人として日本語を使用し、アメリカの土地に居住しながら、アメリカに生活する日本人の日常を題材に、日本人読者に向けて創作した。どの国の人間として、どの国や土地で、何語を使用して物事を観察、思考し、表現するか、そして読者は誰を対象とするか。こうした要素の複層性が、日系アメリカ人の文学活動と作品の留意すべき特徴となっている。野口や翁のような作家もその事例に当てはまるが、他には「帰米二世作家」という、特殊な境遇のもとに文学活動を行った者たちも興味深い。その一人が山城正雄（1916- ）である⁹。彼は、ハワイのカウアイ島に沖縄出身の両親のもと、移民の子として生まれた。両親がハワイの衛生局（Hawaii State Department of Health）と日本領事館の両方に出生届けを提出したため、アメリカ、日本の二つの国籍を持つ¹⁰。幼少期に両親が亡くなり、両親の故郷沖縄の親戚に預けられ、8歳まで日本の小学校に通い、日本語環境のなかで育った。その結果、日本語が母語であり彼の第一言語となる。1924年、ハワイに帰米し、再び英語世界に戻ってくるわけだが、英語に対する苦手意識やアメリカ社会への適応、自身のアイデンティティの所在に悩み、それらの感情を日本語詩に込める。彼の創作や思考の基盤は日本語、日本文化にあった。またアイデンティティも日本人であると認識し、アメリカよりも日本に一層の親和性を感じるが、その一方で、日本の日本人とは異なるという、板挟み的な感情と寂しさを抱いて、詩や随筆を書いてきた。

ハーンの場合はどうであろうか。まず言語の側面に着目してみると、母親がギリシャ出身であったことから、ハーンが最初に耳にし、話した言語は、ギリシャ語だったと考えられる。その後、アイルランドに渡り、大叔母のもとで教育され、また学校においては英語世界に浸っていたため、英語が彼の第一言語となっていた。その英語能力を基盤としながら、11歳ではフランスの教会学校で学び、フランス語環境にも接している。アメリカ時代には、英語で記事を書くことが主で、英語によって記者、作家として身を立てていった。その一方、フランス語の翻訳や、スペイン語、中国語を学ぶなどの、多言語による活動も行っている。日本に渡って以降は、妻セツ、子供たちとの日常的会話として、日本語と英語混じりの言語を使用し、日本語世界にも足を踏み入れてはいるが、創作の基本、思考の基軸は常に英語であった。国籍との関係を考慮してみると、ハーンは最終的に日本国籍を取得、帰化し、日本名「小泉八雲」を持つ。

こうした言語と国籍に関する複層性は、ハーンのアイデンティティにどう影響を与えただろうか。ハーンが日本国籍を取得するにあたっての理由は、英国籍のままでは彼の財産を妻子に与えられないという、法的な問題が生じ、家族を守っていくためだったと言われている¹¹。相続という実質的な問題だけではなく、日本国籍を取得する行為と自身のアイデンティティとの関わりについて彼が率直にどう考えたか、その点を再考することも必要であろう。また、日本国籍者として、日本人の妻と子供たちとともに日本に居住するが、思考の基盤は英語にあり、英語を使用して、英語読者に向けて、日本をテーマとする文学作品を生み出すという、彼の文学創作における複層性、この点に

ついて日系アメリカ文学のように、国家間の「越境」をとまなう他の文学のありようを視野に入れて、再考してみることに意義があろう。

2. ハーン評の系譜の再考—アイデンティティを軸に

次に、ハーンが当時の作家、評者たちによって、どう捉えられていたのかも興味深い。ハーン評を書いた作家、知識人たちのなかで、「越境」経験のある者たちが、ハーンの多重のアイデンティティに関してどう論じているかを探ることも可能である。この場合の「越境」の意義、程度をどのように定めるかは、吟味する必要がある。大久保喬樹『洋行の時代』(1968)で詳述されているように、明治の作家たちには、森鷗外、夏目漱石、有島武郎、高村光太郎など、「洋行」や「外遊」と称されるような海外留学が盛んであり、海外生活経験を持つことで、自身に向き合い、日本の国家、文化・文学のありようを思考し、作品を創作した多くの事例がある¹²。速川和男『小泉八雲の世界』(1978)には、佐藤信夫、小川未明、夏目漱石らをはじめとする作家、詩人たちとハーンとの接点が記述されているが、彼らは遊学や留学、あるいは日本において英語を学習し、翻訳や創作を試みるなど、英米文学、欧米の文化に興味を抱き、積極的にそれらと接触した¹³。「越境」には、目的、滞在期間、移動先での社会との関わり方の差異など、その意味するところに幅があるが、厳密な定義をひとまず保留して、ここではまず比較的滞在期間が長く、その土地で旅行者としてではなく生活者として過ごしたと考えられる作家、知識人に着目してみたい。

まず先述の野口は当然、考察に値しよう。野口に関しては、堀まどか『二重国籍詩人』の第九章「ラフカディオ・ハーン評価」で野口とハーンの接点、共通項などが探られている。堀は、1931年出版の改造社『現代日本文学全集』(1931)に、小泉八雲、ラーファエル・ケーベル、野口米次郎の三人がそろって収録されていることに注目し、三者の共通項として、「二重国籍性、隠棲への傾き、内面に持つ暗闇」と簡潔に言及している¹⁴。他には、日本人基督公会にも所属し、アメリカ留学経験もあった伝道者、英語教育者、そしてハーンの友人だった雨森信成も重要な存在である。彼自身の経歴についてもまだ明らかにされていない点が多い。『アトランティック・マンスリー』に英語で追悼文を寄稿した経緯と彼のアメリカでの経験も明らかにされたい点だ。それらを踏まえ、雨森がハーンをどう評価したのかが重要である。また、日本人移民社会の実情を観察して、『あめりか物語』(1908)を出版した永井荷風も挙げられよう。速川は『小泉八雲の世界』で、永井の日記『断腸亭日乗』の記述から、彼のハーンに対する関心について言及している¹⁵。越境経験のある作家たちが、彼ら以上に複層的な越境経験を持つハーンをどのように論じているのか。ハーンとの関連、類似点、相違点を検討することによって、明治末から大正、昭和初期にかけての、日本人作家、知識人たちによる異文化への眼差し、異文化に接触した際におけるアイデンティティや主体の認識に関するありようを検証することができるだろう。

また、ハーンを日本人がどう評価したかの変遷は、日本と西洋との関係、オリエンタリズムの問題を考えることにも寄与すると思われる。福間良明「ラフカディオ・ハーン研究言説における『西洋』『日本』『辺境』の表象とナショナリティ」(2002-2003)¹⁶は、戦前の小泉八雲研究を「ハーン学」と捉え、そこに表れる「西洋」「日本」「辺境」の表象を分析することによって、それら三つの

地場が交錯して表出されるなか、日本人知識人たちのナショナリズムがどう表現されているのか、その変遷を辿っている。

3. その他の論点

以上の論点の他、日系アメリカ文学、日系移民史との関連から、新たな視点を提起してみるならば、ハーンを「移民」という角度から捉えることも有用であろう。優れた作家として成功した後世のハーンからさかのぼって、彼の人生を考察するときには、「移民」という視点はなかなか出てこない。しかし、ハーンのアメリカ生活は、移民船に乗って大西洋を横断したことで開始している。そして、彼は移民列車に揺られ、ニューヨークからシンシナティに移り、日雇いのその日ぐらしの生活をしばらくは送っていた。その暮らしぶりは、貧しい移民労働者たちの生活と何ら変わらなかったであろう。この論点との関わりで言えば、これまで研究蓄積の少ない、シンシナティ時代に光を当て、移民やマイノリティに対するハーンの見解に言及したのが、ロジャー・S・ウィリアムソン『シンシナティ時代におけるラフカディオ・ハーン的基本的見解の展開と実現』（2005）である¹⁷。ウィリアムソンは、アフリカ系アメリカ人の処遇に象徴される人種差別問題にも着目して、ハーンの世界観の形成を探っている。祖先が奴隷として連行され、辛酸をなめてきたアフリカ系アメリカ人、19世紀末から急増した南欧、東欧からの新移民、および中国人、日本人などのアジア系移民が、マイノリティとしてアメリカ主流社会のなかで不平等に扱われ、問題視されてきた点を、ハーンがどのように捉えていたのかも、より一層深めるべき論点であろう。

また、世界を渡り歩いてきたハーンを、「コスモポリタン」と称することもある。この語は、定義が明確でないまま、例えば、根無し草的な人物というおおよそのイメージをともなって、過去、現在において使用されてきた傾向がある。百科事典による一般的定義としては「個人がその属する民族、国民、国家などに特有な価値観や偏見をすてて、全人類を同胞とみなす人生論的な立場」と記述されている¹⁸。この定義の源泉は、古代ギリシャのキュニコス派の哲学者ディオゲネスが、自身を「コスモポリテス（世界市民）」と称し、都市国家（ポリス）への所属を否定したことに始まる。その後、ローマ帝国の建設によって様々な地域に居住する人々の統治という観点から、「世界市民」「コスモポリタニズム」という概念が生まれることになった。さらに中世に入り、キリスト教がヨーロッパの人々の間に浸透したことで、キリスト教を強い絆とした広範囲な共同体として「コスモポリタニズム」が想起された。そうしたキリスト教にもとづく「コスモポリタニズム」の概念は、中世末期、宗教改革や宗教戦争によって崩れ、国家のあり方も、キリスト教という普遍的なものによる結びつきから、君主、のちには国民を主権者とする主権国家体制へと変容していく。そして近代においては、18世紀に活躍する啓蒙主義者たちが、「コスモポリタニズム」の概念を深化させていった。代表的な論者はドイツの哲学者イマヌエル・カントであり、彼は、道徳的な理念に留まらず政治的な側面にも目を向け、「世界市民法」の形成や、永遠平和をもたらすための自由な国家の連合という体制を構想した¹⁹。

1900年代から1920年代頃にかけて、アメリカではコスモポリタニズム思想に関連した言説がよく見受けられ、特に、移民、人種問題に関心を持った知識人たちの間で、コスモポリタンという概

念が、漠然とした側面もあるが、広まっていた。その例として、1910年代半ばの第一次世界大戦前後に活発な言論活動を行った、ホレス・カレン（Horace Kallen）（1882-1974）やランドルフ・ボーン（Randolph Bourne）（1886-1918）、アラン・ロック（Alain Locke）（1885-1954）が挙げられる。当時、アメリカの知識人たちの間では、アメリカが「人種のるつぼ」（Melting Pot）であり、様々な人種・民族の移民たちが、「アメリカ的」文化に合致する人間に変容して「アメリカ人」となる同化イメージが流布していた。また、世界大戦に向かう世相のなか、ナショナリズムが高まり、愛国的と思われぬ異端な者に対する排外的雰囲気も世間を覆っていた。そうした状況を厳しく批判し、個々人が持つ民族的特性や文化を維持しながら、公的な領域で共生をはかるべきだと主張したのがカレンやボーンであった。特にボーンは、論文「トランスナショナルアメリカ」（“Trans-National America”）で、白人主流社会からは劣等人種だとみなされている移民たちも、アメリカという共通の国家に生きており、その国家はコスモポリタンの理想（a new cosmopolitan ideal）にもとづいて作り上げられていくと述べている²⁰。また黒人作家のロックは、西洋哲学におけるコスモポリタニズムに関して、それが西洋的文化・価値観を普遍的なものとみなすため、西洋列強の植民地主義、帝国主義をかえって擁護していると批判した。そして、人類に共通な文化と同時に、各地方の文化や、人種・民族的文化の多様性を尊重するような新たな「コスモポリタニズム」を模索した²¹。

先述した翁久允も、自身をコスモポリタンだと捉え、アメリカでの経験にもとづく日米文化比較の随筆集を『宇宙人（コスモポリタン）は語る』（1928）と題して出版している²²。野口もまた、「私は日本主義の宣伝者であると同時に世界主義の宣伝者である」と述べ、「世界主義」の言葉を使って、東西文化をまたぐ自身の両義性を説明している²³。加えて、アメリカでは1886年に家庭向け雑誌『コスモポリタン』（*The Cosmopolitan*）が創刊され、1890年6月号の同誌にはハーンのマルティニーク島での見聞が、「西インド諸島における混血人種考」との記事で掲載されている²⁴。19世紀末から20世紀半ばにかけては、植民地主義や帝国主義の広まりとともに、一国を超えた、世界という認識、世界市民主義、コスモポリタニズムという思想が興味深く考察された時期であった。この流れにおいて、ハーンの文学的軌跡を再考することも重要な作業であろう。

また、日系アメリカ文学の著作や日本人移民問題も視野に入れ、近代西欧社会（特にアメリカ）における日本観の変遷を捉え直し、そこにハーンの抱いた日本観がどう位置づけられるのかを検討することも興味深いテーマである。19世末から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは絵画や工芸品を中心として、ジャポニズム（日本趣味）の文化的現象が現れ、それに影響されるかたちで、アメリカではジャポニズム小説が人気を博した。ジャポニズム小説流行と同時期に、ハーンは、彼が理解する日本の真像を、アメリカを中心とする西欧諸国に向けて発信している。また野口は、ジャポニズム小説に描かれる日本のイメージを批判しつつ、一方ではそのジャポニズム流行の機運にのるかたちで、小説『日本少女の米国日記』（*The American Diary of a Japanese Girl*）（1902）をMiss Morning Gloryの筆名で発表した。また日本の精神や宗教観を日本人が紹介し、アメリカ社会で多くの読者を得た著作としての先駆けは、新渡戸稲造『武士道』（*Bushido: The Soul of Japan*）（1900）である。新渡戸の著作と同様にベストセラーとなったのは、旧長岡藩家老の家に生まれ、の

ちアメリカに渡った杉本鉞子（エツ・スギモト）による『武士の娘』（*A Daughter of the Samurai*）（1925）である。この作品は、日本での厳しい躰、渡米後の異文化接触の経験を女性の視点から描き、ヨーロッパ七か国で翻訳されるほど多数の読者を得た。

真の日本像とは異なるものであっても、好意的に日本を解釈し、日本の文化を歓迎したジャポニズム小説、そして新渡戸、ハーン、野口、杉本らの作品が、アメリカ主流社会で受容されていた一方で、西海岸を中心に日本人移民排斥の動きは、1907～8年の紳士協定、1910年代の各州での外国人土地法、そして1924年の移民法（排日移民法）制定に表れているように、しだいに高まっていた。そして日本が軍国主義のもとに、中国、朝鮮半島、東南アジアへと進出、そして日米関係の悪化と太平洋戦争開始にいたるにつれて、好意的な日本イメージは封じられていく。ジョン・W・ダワー（John W. Dower）『容赦なき戦争—太平洋戦争における人種差別』（*War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*）（1986）で詳細に論じられたように、アメリカにとって敵である日本人は、黄禍論とも結びつき、狡猾で珍奇、そして野蛮なサルのような人間として描かれる。そして、その表象は軍国主義日本のイメージが付され、アメリカの戦時プロパガンダにのせられて、雑誌、新聞、広告、大衆小説、映画を通じて流布されていく。こうした日本観変遷の流れにおいて、ハーンの日本観を検討することにより、ハーンがアメリカ社会にもたらした日本像の新たな意義づけも期待できよう²⁵。

III まとめ

以上のように、ハーン研究において、日系アメリカ文学、日系移民史との比較の視点を持ち、「越境」「アイデンティティ」をキーワードとして、いくつかの論点や再考点を探ってみた。それらに関して、これまで全く考察がなされていないわけではない。例えば、アイデンティティとの関連で言えば、ギリシャ人の母が日本人研究者ハーンに与えた影響を平川祐弘はすでに論じているし²⁶、言語の問題についても、平川はハーンと妻セツとの「ヘルンさん言葉」を詳述し、ハーンの人となりを描いている²⁷。膨大な研究蓄積が存在するなかで、その間隙を見つけていくことは至難の業であるが、日系アメリカ文学、日系移民史における「越境」「アイデンティティ」というテーマを比較点として、ハーン作品研究を包含しながら、それを生み出した環境、ハーンの生涯にわたる創作の営みを考察することで、ハーン論を深化させ、新しい見解を提示できる可能性がある。またハーンを他者がどのように捉え、論じたのか、イギリス、アイルランド、フランス、アメリカ、マルティニーク、日本といった、関係する国々において、ハーンがどう受容され、評価されてきたのかという点には、まだ検証すべき事柄が多々あると考えられる。そして、ハーンをめぐるこれらの問題の探究は、同時に近代日本のありかた、異文化との出会い、東西文明・文化の対立や位置関係の、より深い理解につながっていくと思われる。

注

- ¹ 森亮『小泉八雲の文学』（恒文社、1980）；平川祐弘編『小泉八雲—回想と研究』（講談社学術文庫、1992）；平川祐弘監修『小泉八雲事典』（恒文社、2000）。
- ² 日系アメリカ人の文学の歴史については、植木照代・ゲイル・K・佐藤編『日系アメリカ文学—三世代の軌跡を読む』（創元社、1997）；拙著、水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて』（風間書房、2012）などを参照されたい。
- ³ 野口の経歴については、堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012）を参照。
- ⁴ 翁の経歴については、翁久允『翁久允全集』1~3巻（翁久允全集刊行会、1971-2）；逸見久美、須田満編『翁久允年譜』（翁久允財団、2014）を参照。
- ⁵ 野口米次郎『二重国籍者の詩』（玄文社、1921）、1-2。
- ⁶ 翁、『翁久允全集』3巻、86。
- ⁷ ハーンの何か国にもわたる足跡に関しては平川、『小泉八雲事典』を参照。
- ⁸ 池田雅之『100分で名著 小泉八雲 日本の面影』（NHK出版、2015）、102-106。
- ⁹ 山城の経歴、文学活動に関しては、山城正雄『遠い対岸—ある帰米二世の回想—』（グロービュー社、1984）；山城正雄『帰米二世—解体していく日本人—』（五月書房、1995）を参照。
- ¹⁰ 基本的には、アメリカ生まれであればアメリカ国籍を得られるのだが、山城の回想によれば、出生届のための費用を節約するため、出生届をハワイの衛生局に出さない日本人移民も多くいたようだ。現に、山城の三番目の姉と弟は、出生当時、衛生局に届け出がなされていなかったという。山城、『帰米二世』、10-12。
- ¹¹ 工藤美代子『神々の国—ラフカディオ・ハーンの生涯—＜日本編＞』（ランダムハウス講談社、2008）、第五章参照。工藤はハーンの帰化に至る過程を、家族との関係、経済的問題、作家としての将来像など、さまざまな側面を考慮して描いている。
- ¹² 大久保喬樹『洋行の時代—岩倉使節団から横光利一まで』（中央公論新社、2008）。
- ¹³ 速川和男『小泉八雲の世界』（笠間選書、1978）。
- ¹⁴ 堀、『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、252。
- ¹⁵ 速川、『小泉八雲の世界』、43-48。
- ¹⁶ 福岡良明「ラフカディオ・ハーン研究言説における『西洋』『日本』『辺境』の表象とナショナリティ」『社会学評論』53巻3号、2002-2003年、329-347。
- ¹⁷ ロジャー・S・ウィリアムソン、常松正雄訳『シンシナティ時代におけるラフカディオ・ハーンの基本的見解の展開と実現』（八雲会、2005）。
- ¹⁸ 『世界大百科事典』10巻（平凡社、1996）、320-321。
- ¹⁹ コスモポリタニズム概念の変遷については、古賀敬太『コスモポリタニズムの挑戦—その思想史的考察』（風行社、2014）を参照。
- ²⁰ Randolph Bourne, “Trans-National America,” *Atlantic Monthly*, cxv III (July 1916): 110; 遠藤泰生「多文化主義とアメリカの過去—歴史の破壊と創造—」油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル・アイデンティティ』（東京大学出版会、1999）、29-33; 前川玲子「ランドルフ・ボーン再考—第一次世界大戦下のアメリカ知識人」『アメリカ史研究』第27号、2004年、20-34。

²¹ 佐久間由梨「アメリカ国内のコスモポリタニズムーアラン・ロックのコスモポリタニズムから読み直す *The New Negro*」『アメリカ文学研究』49 巻、2013 年 3 月、21-38。

²² 翁久允『宇宙人（コスモポリタン）は語る』（聚永閣、1928）。

²³ 堀、『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、318。

²⁴ 工藤美代子『夢の途上ーラフカディオ・ハーンの生涯 <アメリカ編>』（ランダムハウス講談社、2008）、229。

²⁵ 太平洋戦争との関わりで言えば、GHQ 最高司令官ダグラス・マッカーサーの副官ボナー・フェラーズは、ハーンの著作の愛読者であり、ハーンを通して日本を理解した。その認識が、昭和天皇の戦犯不訴追や象徴天皇制を決定する上で、影響を与えたという見解もある。加藤哲郎「ハーン・マニアの情報将校ボナー・フェラーズ」平川祐弘、牧野陽子編『講座小泉八雲 I ハーンの人と周辺』（新曜社、2009）、597-607。

²⁶ 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン』（ミネルヴァ書房、2004）、第四章。

²⁷ 平川祐弘『小泉八雲 西洋脱出の夢』（講談社、1994）、第一章。